

野上豊一郎の翻訳論

長沼美香子

(立教大学)

The purpose of this paper is to shed new light on one of the most comprehensive yet somehow neglected discourses on translation in Japan. It will scrutinize Nogami Toyochiro's book entitled Honyakuron: Honyaku no riron to jissai (On translation: theory and practice in translation) together with his short essays in the socio-cultural context of the Taisho and early Showa periods (roughly speaking the 1910s to the 1930s). In order to problematize contradictory ideas that appear in his remarks, Nogami's early theoretical works on translation will be firstly reviewed. Then this paper will focus on his key concepts claimed in Honyakuron as compared with those of a British classicist, John Percival Postgate's Translation and translations: Theory and practice. Inspired by Beverley Curran, the author highlights the influence from Postgate's theoretical framework and also discusses Nogami's Honyakuron in the environment of translation in pre-war Japan.

1. はじめに

近代日本における翻訳に関する言説を考究する際に、1938(昭和13)年に上梓された野上豊一郎¹の『翻譯論—翻譯の理論と實際』は、最重要となるもののひとつであろう。これは、昭和初期の日本で誕生した200頁超にわたる包括的な翻訳論である。本書の「序」冒頭で野上はこう記す。

世界が一つの讀書サークルを形づくろうとしたのは大分以前のことであつた。西洋で逸早くそれは形づくられ、思想的に國境はとづくに取りはづされ、東洋でも日本は率先してそれに参加した。コンミュニズムの思想・ファシズムの思想といふやうなものも、それぞれさういつた傾向の一つの現はれである。更に文學の思想傾向に至つては、一層顯著な世界的展開を見るやうになつて居る。
(野上 1938, p. 1)

欧米列強の近代国家と比肩しようとする日本が、文學の分野においても世界を意識していることを窺わせる一節である。このような時代にあつて、英文学者の野上は翻訳に関する短い

NAGANUMA, Mikako, "Nogami Toyochiro's Discourse on Translation". *Interpreting and Translation Studies*, No.10, 2010. pages 59-83. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

論考をいくつか発表した後に、集大成ともいえる本書を出版した。出版直後の書評を読むと、当時の日本の翻訳界に及ぼした影響は小さくなかったと思われる。だがその後、『翻譯論—翻譯の理論と實際』の内容は理論的に継承されることもなく、いわば孤立した翻訳論となった。そして、「無色的翻譯」論などと単純化されて批判の俎上にのせられることはあっても、詳細な分析はなされてこなかった。ただし近年になって、記述的な翻訳研究の視座からの見直し(たとえば、Kondo & Wakabayashi 1998; 水野 2007; 佐藤 2008; 大久保 2009 など)、部分的に試みられている。

野上のテキストには整合性を欠くように思われる主張がある。この点に関してこれまで検証されていないことを鑑み、本稿では、野上の他の論考と合わせて『翻譯論—翻譯の理論と實際』をていねいに読み直す。と同時に、英国の翻訳論との関係にも注目する。

カレン(Beverley Curran 2008)の示唆に導かれて、英国の古典学者ジョン・パーシヴァル・ポストゲイト(John Percival Postgate)が 1922 年に発表した *Translation and translations: Theory and practice* と野上の接点を確認するために、カレンの分析が具体的に及んでいない細部にまで踏み込むことで、新たな知見が得られるのではないかと考えている。野上とポストゲイト、両者の言説をつぶさに比較し、さらに、大正から昭和初期にかけてのわが国における翻訳界のコンテキストも踏まえて考察することで、近代日本の本格的な翻訳論と目され得る野上のテキストを読み解いていく。

2. 翻訳に関する野上豊一郎のテキスト

野上豊一郎(1883-1950)は、能の研究でも著名な英文学者である。旧制第一高等学校在学中から夏目漱石に師事し、俳句などを発表していた。東京帝国大学英文科に進み、卒業後間もなく法政大学の講師となり、途中一時期を除いて同大学に奉職し、戦後最初の総長を務めたが、在職中に病死。その遺志を継いで、没後の 1952 年に野上記念法政大学能楽研究所が設立されている。作家である妻の弥生子(1885-1985)との往復書簡『山莊往来』からは、晩年の私生活の様子も垣間見える。

野上が遺した著作の全貌は、法政大学図書館勤務の関栄司による「野上豊一郎博士著作目録」のなかで、著編書、雑誌掲載の論考・評論・随想、翻訳書などに分類されてほぼ網羅されている(関 1993)。代表的著作には『能—研究と發見』、『能の再生』、『能の幽玄と花』など能に関するものが多数あり、2009 年刊行の二巻本『野上豊一郎批評集成—能とは何か 上・下』には、前述三部作の全論文が再分類のうえ収録されている。また、ロティ著『お菊さん』、オースティン著『高慢と偏見(上巻)』(下巻は平田禿木訳)、スウィフト著『ガリヴァの航海』、デフォー著『ロビンソン・クルーソー』などの文学作品の翻訳書もある。

1938(昭和 13)年の『翻譯論—翻譯の理論と實際』は、野上豊一郎の翻訳論の集大成である。「岩波講座 世界文學」のシリーズとして 1932(昭和 7)年に刊行された小冊子『翻譯論』が、そのまま「翻譯の理論」という章として再録されて、この章が全体の主要な理論的枠組みとなっている。さらに「翻譯の態度」「日本文學の翻譯」「謡曲の翻譯について」「蒟蒻問答」などの章が追加され、236 頁の書籍としてまとめられた²。本書は昭和初期の近代日本における先駆的

な翻訳論であるが、これ以降、野上は翻訳論を一切発表していない。

翻訳に関する野上のテキスト全体を考察対象とするうえで、本稿では1932年に先立つ時期に発表された論考を前期、それ以降のものを後期として分析をすすめる。まず以下で前期の翻訳論を中心に論じて、後期における主要概念については第4章で詳述する。

2.1 『翻譯論』(1932)より前の翻訳論

前期に属する主な翻訳論としては次のものがある。「自分を捨てることの必要—翻譯の根本問題に関する一つの注意」(1919)が『新潮』に、「翻譯可能の標準について」(1921a)が、東京帝國大學英文學會の編纂による『英文學研究』に、そして「翻譯可能の範圍に就て(英文學會に於ける野上白川氏³の講演)」(1921b)が『英語青年』に掲載されている。なお、『英文學研究』誌には、『翻譯論』刊行と同年(1932年)の1月に「翻譯と能」という論考も寄稿されているが、これは後期に属するものとしたい。この「翻譯と能」は、日本の伝統芸能である能の英訳を論じるに先立ち、「翻譯の第一要件は忠實といふことでなければならぬ」という主張に始まり、ロセッティ、カーゾン卿、ヴィラモーヴィッツ＝メーレンドルフなどを援用しており、『翻譯論』での理論的枠組みがすでに一部述べられている。このような西洋の文献に依拠した点は、野上の後期翻訳論におけるひとつの特徴でもある。

まず、1919(大正8)年の「自分を捨てることの必要—翻譯の根本問題に関する一つの注意」では、翻訳においては「他の者の中へ入り込まねばならぬ」と論じている。

翻譯(文學上の)に大切なことは先づ自分を捨てることである。自分を捨てなければ、他の者の中へは入れられない。翻譯するには他の者の中へ入り込まねばならぬ。さうしてその中から出て來なければならぬ。但し出て來る時は既に自分ではなく、自分が入り込んでゐた者の分身になつてゐなければならぬのである。(野上 1919, p. 108)

さらに続けて、「翻譯の最上の可能は原作者と同化することである」とも述べている。翻訳者が「原作者と同化する」ということは、目標言語の読者側から見れば、翻訳者が起点言語の原作者側に「異化」することであり、「著者をできるだけそっとして」おくというドイツ・ロマン派のシュライーマハーの言説(1813/2008, p. 38)を連想させる。また、スタイナー(Steiner 1975)が*After Babel*で展開した「解釈の運動」を彷彿とさせる(スタイナーを半世紀も先取りした形になるが)。主著の『翻譯論—翻譯の理論と實際』のなかで、「無色」「單色版^{モノクローム}」「等量」という一連のキーワードが反復され、ゆえに、野上の翻訳論は「直訳」へ傾斜するものと短絡的に見なされてきた面もあるが、「自分を捨てること」は、単純な「直訳」志向ではない点に注意が必要であろう。

言語類型の異なる西洋語と日本語との間での翻訳は、野上にとって「既に一つの矛盾」であった。そして、「通辯的翻譯者」も「翻譯的模倣者」もどちらも否定されることになる(強調原文)。

譯者は皆此の矛盾の前に立つてゐるのである。此の矛盾を解決し得ないで、たゞ原作者が「何」を言つて居るかだけを無造作に傳へて安心してゐられる通辯的翻譯者と、それから更に器用ではあるが、その器用が無益に働いて自分をのみ飾り立てることに腐心する翻譯的模倣者と、此の不完全な二種のタイプがあることは上に云つた。今日の所謂翻譯の大家は殆ど皆後者である。而して下手な面白くない小家は皆前者に属する。

(野上 1919, p. 111)

このような考え方は 1921(大正 10)年の 2 つの論考(ひとつは講演録)にも、基本的に受け継がれるが、同時に野上は矛盾から解放される出口をも模索する。『英文學研究』に寄稿した「翻譯可能の標準について」では、次のように書く。

此處に若し用心ぶかい翻譯者があつて、その人の翻譯が原物と全く別種の感情氣分を表はすことになりはしないかといふ憂慮から、或る中間的な、無色無味無臭な翻譯を期待して、それを造り出さうと試みたならばどうであらうか、と。假にさういふものが造り出されるとしたならば、非常に便利であらうとは思はれる。併し、それは果して期待され得ることであらうか。(中略)氣分を全然除き去つた中間的の無色無味無臭的の表現を翻譯に期待するといふことは意味を成さないわけである。(中略)私たちは此の消極的方法を捨てて、進んで原物の感情氣分を出来るだけ完全に移し傳へるやうに努めようではないか。

(野上 1921a, pp. 131-133)

同年 11 月 12 日に開催された英文学会の講演では 30 余名の出席者を前にして、野上はこの持論を深化させる。つまり「翻譯者は、眞裸體となつて原作の中に飛び込めと云ひたい。(中略)自分を空にしてかゝるところから模倣的と創作的との two aspects が各持つてゐる難點と或る點まで妥協が出来る」というように、「翻譯者が作家の骸までも appreciate すること」を強調する一方で、「中間的無味無色の翻譯」に対して徹底的に批判して、「實際この無味とか無色とかがまた色であり味であるから、さう云ふ議論には私は賛成出来兼ねるのである。(中略)無味無色と云ふことが一文の價もないものだと判れば、文學的翻譯には大いに原作の色や味や氣分を出さねばならないとの結論となる」とさえ主張する(野上 1921b, p. 182)。特に「大いに原作の色や味や氣分を出さねばならない」という点は、一般的に野上の翻譯論における鍵概念として周知されている「無色的翻譯」あるいは「單色版的翻譯」^{モノクローム}とは、眞つ向から対立する言説である。ここに、野上の翻譯論における前期と後期の乖離が顕在化すると指摘しておこう。

2.2 和解と等価

本稿では 1932(昭和 7)年以降の野上の論考を暫定的に後期とした。その理由は、「岩波講座 世界文學」の『翻譯論』が刊行されており、後期の主要な理論的枠組みがまとめられたのが、この年だからである。ちなみに同年には、「岩波講座 日本文學」のシリーズとして『日本

文學と外來思潮との交渉(四)西洋文學』も出版されており、これは翻訳を直接のテーマとした小冊子ではないものの、明治 10 年前後の翻訳書における戯作者風の表現傾向が、挿絵や(割註の冠冒の付いた)標題なども含めて、「惡趣味の流行」「通俗的適應性」と批判されている(野上 1932b, pp. 15-22)。その理由は、「和解」という「和語を以つて和風に解釋衍義する」行為によって、外国の事物が日本風に適應してしまうからである。

蘭學以來和解といふ術語が使用されてゐた。外國語の意味を日本語で表現することで、蘭書和解の御用とか、「波留麻和解」とかいふ風に用ひられた。そのほか釋辭とか譯語とか翻譯とかいふ言葉も早くから用ひられたが、特に和解といふ場合には、和語を以つて和風に解釋衍義するといふ意味が多く含まれてゐたやうに思はれる。だから、必ずしも原物と同量の譯語を以つて同質の表現を作り出さねばならぬといふやうな嚴密な制限に支配されることなく、自由に敷衍したり、任意に省略したりすることが許されてゐた。即ち、原物と同價値のものを再現せしめようとするのではなく、ただ原物について説明紹介すればよいのであつた。此の粗漫な態度が長く續いた結果、適應といふことが主要なる條件である如く考へられた。外國の事物を外國の事物らしく表はすのではなく、日本に適應して日本の事物らしく表はすことが必要であるかの如く考へられた。

(野上 1932b, pp. 19-20)

野上は「和解」としての翻訳を批判し、「原物と同量の譯語を以つて同質の表現」を創造することを重んじる。「和解」では「等価(equivalence)」が達成できないと考えたのであろう。野上自身は「等価」という語は用いておらず、「同價値」という表現で論じているが、問題意識としては同じ地平にあると考えられる。「原物と同價値のものを再現」するのではなく、「ただ原物について説明紹介」という傾向への批判である。同様の概念は、すでに 1921(大正 10)年、次のように提唱されている。

翻譯は A の國語で言ひ表はされてある事なり心持なりを、その通りに B の國語で言ひ表はさうとするのであつて、其の際、原物に盛られた思想感情の同じ分量が複製の中にも盛られねばならぬのである。盛られたものが原物に比較して過多に失する場合も、不足の場合と同様に失敗である。ただ表現する言葉が違ふだけのことで、中身は全く同じ本質で、同じ分量でなければならぬ。

(野上 1921a, p. 135)

ここに述べられた「思想感情の同じ分量」「同じ本質で、同じ分量」という考えは、「等量的翻譯」と概念化されて後期の翻譯論に再び登場することになる。前期から後期になると、「無色的翻譯」に対する野上の態度が変わる一方で、「等量的翻譯」という概念は通奏低音のように響いている。それは、「西洋のものを日本のものらしく書き直す」という意味での等価ではなく、「西洋のものを西洋のものらしく日本語で表現する」ために、「從來の日本文の文脈を破り」、新たな表現様式を作り出すことを志向したのものである(野上 1938, pp. 195-234、強調原文)。

野上が日本語と西洋語との間に対等な関係を求め、その翻訳に等量な等価性を模索する姿は、日本が欧米諸国と対等であろうと渴望した時代にそのまま重なる。

次に、1932年以降に野上が展開した翻訳論に新たな視点から光を当てるために、ほぼ同時代に英国で活躍したジョン・パーシヴァル・ポストゲイトに注目してみたい。

3. ジョン・パーシヴァル・ポストゲイトの翻訳論

ポストゲイト(John Percival Postgate: 1853-1926)は、英国の古典学者である。ラテン語韻文の研究を専門分野としており、学術誌 *The classical quarterly* などの編集にも携わった人物である。ちなみに長男は、ジャーナリストで作家の Raymond William Postgate (1896-1971) で、その代表作 *Verdict of twelve* (1940) は『十二人の評決』(黒沼健訳)として1954年に邦訳され、1999年には改訂訳も出ている(いずれも江戸川乱歩の解説を収録)。

本稿で分析の対象とする *Translation and translations: Theory and practice* は、1922年にロンドンの出版社から刊行された200頁余りの書籍である。第1部は Translation と題した理論編であり、第1章 Principles and theories、第2章 Translation in practice、第3章 Translation of verse から成る。続く第2部の Translations は対訳集という体裁をとり、Retrospective translations (回顧的翻訳) と Prospective translations (先見的翻訳) の2つに区分されて、ラテン語、ギリシア語、英語の古典作品からの翻訳例(主として韻文)を豊富に掲載しているのが特徴である。

ショーレイ(Shorey 1923)は、出版翌年の書評で次のように評している。

He does not hesitate to exploit his predecessors – Tytler, Blass, Cauer-Tolman, Wilamowitz, Gildersleeve, Arnold, T. H. Warren, Browning, Fitzgerald, and Flora Ross Amos' Columbia College dissertation on early theories of translation. He cites again many of their illuminating instances and repeats their stories. ... He discusses with unabated zeal the eternal questions “Should a translation be ‘free’ or ‘literal’?” Should its aim be the pleasure of the general reader or the approval of the scholar? Should it read like an original? May the translator improve upon his author? Are anachronisms and modern allusions permissible? ... Should the translation be commensurate with the original, line for line, or admit some license of expansion and contraction? ... On all these points Professor Postgate finds something pertinent and suggestive, if not always something absolutely new, to say. (Shorey 1923, p. 281)

ショーレイの指摘にもあるように、本書でのポストゲイトは、多数の翻訳理論家—タイラー、ブラス、カウエルとトールマン、ヴィラモーヴィッツ、ギルダースリーヴ、アーノルド、ウォレン、ブラウニング、フィッツジェラルド—さらにアモス(Amos 1920)がコロンビア大学に提出した博士論文 *Early theories of translation* で取り上げた先人たちに依拠しながら、翻訳にまつわる「永遠

の問い」を探究する(たとえば、「自由訳か直訳か」など)。第1部の理論編では、みずからの翻訳実践も踏まえているものの、先行文献を総花的に紹介しており、その内容に必ずしも独自性があるわけではないが、これは Preface のなかで以下のように書いて、ポストゲイト本人も認めている。

For fifty years in various capacities I have had to concern myself with Translation. In the hope that what I had done and suffered might be made of use to other workers in this field I resolved to give the results of a part of my efforts to the world, prefaced by a brief statement of the principles and methods to which, consciously or unconsciously, my practice had adhered. This I soon discovered could not be fitly presented without reference to the work of my predecessors... (Postgate 1922, p. v)

さて、ポストゲイトの翻訳論は、その後の翻訳研究にどのような影響を与えたのであろうか。彼の *Translation and translations: Theory and practice* を引用している翻訳研究のひとつとしては、セイヴァリー (Savory 1957) がある。これは、『翻訳入門』(別宮貞徳訳)として1971年に邦訳書が出版されており、次のようにポストゲイトを取り上げている。

ポストゲイト (Postgate)^{注五九}をして、忠実の原理は真の翻訳の価値としてうちたてられたもので、「それは一般の同意によるが、広く実行されているわけではない」と言わしめたのである。翻訳に自由を許す立場で書かれたものは、大体、次のような印象を与えるものが多い。すなわち、翻訳者は原作に近づこうとする努力を避け、ロセッティの書いているような自己否定の規律にも欠けるので、その代わりに自分でもできる「原理」を見つけるか、考え出すかして、自分の行為を正当化し、かつは、良心を慰めているのだ、と。

(セイヴァリー 1971, pp.76-77)

ポストゲイトの『翻訳と翻訳者』(*Translations and Translators*)の中でもっとも感銘の深い箇所では、かれは、根本原理として、散文は散文に、韻文は韻文に訳せねばならぬと述べ、それにつけ加えて、この最初の方は誰も疑う者はいないのに、あとの方は、多くの人が問題にしたがる、と言っている。(中略)ポストゲイトの仮借ない論理——散文を散文に、韻文を韻文に——を頭におきながら、まず最初に、韻文訳賛成論を検討するのが適切かと思う。

(セイヴァリー 1971, pp. 125-126)

上記で「ポストゲイト (Postgate)」に付された「注五九」は訳者である別宮の注記であり、「詳細不明。著書に *Translations and Translators*, 1922 がある」とポストゲイトを紹介している。ここでの書名の誤りは、原著 Savory (1957, pp. 125-126) をそのまま踏襲したものである⁴。他にもセイヴァリーの同書では、韻文の翻訳に関してポストゲイトに言及している次の箇所がある。

カドワースの訳はポストゲイトの注目をひいたのだが、ポストゲイトの指摘によれば、カドワースの使った、弱強五歩格三行、弱強三歩格一行の形は、サフオー調のラテン語三十八シラブルに相当するものとして、英語のシラブル総計三十六を含む。カドワースは、「英語の比類なき簡潔さ」はかくのごとく明らかだと言うのだが、ポストゲイトはそれに反対で、ホラティウスを訳すときには、ことば数が多いことは絶対にいけない、サフオー調は英語のわずか二十五シラブルにおきかえられるという。

(セイヴァリー 1971, p. 215)

また、モーガン(Morgan 1959)が ‘A critical bibliography of works on translation’ としてまとめた文献リストも、「翻訳に関する文献書目解題」(1970)として邦訳されているが、ポストゲイトの文献を次のように載せている(冒頭の数字 109 は、文献整理のために訳者が追加した通し番号である)⁵。

109. 1922 年。POSTGATE, J. B.「翻訳と翻訳者たち、その理論と実際」。ロンドン——「翻訳の最大の美点は忠実さである」「忠実な翻訳者は、可能な限り、言葉を重んじるが、いずれにせよ、心は伝わる」「意識する者は、往々にして言葉を犠牲にする余り、心まで見失ってしまうことがある」
(モーガン 1970, p. 359)

イニシャル「J. B.」は原著の誤植をそのまま踏襲したものであり、書名「翻訳と翻訳者たち」は *Translation and translations* の誤訳である。解題のポイントが「忠実さ」であることから、当該のポストゲイトの文献であると断定してよいだろう。

Weissbort and Eysteinnsson が編集した *Translation - theory and practice: A historical reader* (2006) は、西洋における翻訳論のテキストをキケロの時代から現代に至るまで年代別に収録したアンソロジーであるが、19 世紀後半から 20 世紀前半の時代区分のなかに、ポストゲイトの著作は収録されていない。ただし文献案内として、“General or introductory books on the practice and/or the field of translation studies” (pp. 629-632) というカテゴリーのリスト内には、Postgate, J. P. (1922) が含まれている。このことから、ポストゲイトの著作は独自の翻訳理論というよりは、概説書という位置づけであることがわかる。

以上見てきたように、西洋の翻訳論史においては必ずしも時代を画するような代表的理論家ではなかったかもしれないが、ポストゲイトは偶然にも 1970 年代の日本で出版された数少ない翻訳論の邦訳書 2 冊のなかで紹介されていたのである。だが、このポストゲイトと野上の接点が示唆されるのは、2008 年にカレン(Beverly Curran) が著した *Theatre translation theory and performance in contemporary Japan: Native voices, foreign bodies* まで待たねばならなかった。

4. 野上とポストゲイトの主要概念に関する比較と分析

カレン(Curran 2008)は、野上へのポストゲイトからの影響について、斬新な見解を示した。野上の『翻譯論—翻譯の理論と實際』では、ポストゲイト(Postgate 1922)から用語・解説・事例が借用されており、その上で日本というコンテキストにそれらが敷衍されているとして、次のように指摘したのである。

Nogami clearly takes terms, explanations and examples from John Percival Postgate's 1922 study *Translation and Translations: Theory and Practice*. However, he extends Postgate's discussion by contextualizing it in terms of Japan and considering how the translation of classic Japanese works compares with that of classic Greek poetry. Further, while *Honyakuron* is largely based on Postgate's discussion of the principles and practice of translating Latin and Greek verse and prose, as a *nô* scholar, Nogami is aware of the translations of classic Japanese works, including those by Ernest Fenollosa and Ezra Pound, and thus alternative approach to translation. (Curran 2008, p 6)

In *Honyakuron – honyakuno rironto jissai* (On Translation: Translation theory and practice), respected *nô* scholar Nogami Toyochirô devotes considerable attention to the translation of *yôkyoku*, the songs of *nô*. As mentioned in the Introduction, Nogami's theoretical 'attitudes' are derived from Anglophone translation theory. A comparative examination shows many of the terms and examples in his study are taken from J. P. Postgate's 1922 *Translation and Translations: Theory and Practice*, but Nogami does not refer to the classics professor or his book by name, although he does not claim all the theories as his own formulations: (Curran 2008, p 118)

このように画期的な着目点を示しているものの、カレンは実際の野上のテキストに即して論じているわけではないので、本稿では具体的に検証する。そうすることで、野上の理論的枠組みがポストゲイトの引き写しである部分を確認し、野上の翻訳論に内在する矛盾との関連を考察する手がかりを探りたい。以下では、野上の『翻譯論—翻譯の理論と實際』(1938)における主要な論点を、ポストゲイトの *Translation and translations: Theory and practice* (1922)と比較して分析していくが、紙幅の都合で限定的な抽出にならざるを得ない点をお断りしておく。

4.1 用語の定義

翻訳を論じる際に必須となる基本的な専門用語 (translation, version, metaphrase, paraphrase, adaptation, imitation など) を定義する部分で、野上の説明と文献引用はポストゲイトのものとはほぼ重なる(表 1 から 4)。

表 1 : Translation と Version

J. P. Postgate (1922, p. 1)	野上豊一郎 (1938, p. 87)
<p>Its Nomenclature, which our language has borrowed from Latin, discloses disparity. 'Translation' is 'transference,' that is merely transport from one medium to another. 'Version' on the other hand is 'turning' and change¹.</p> <p>(Note)</p> <p>1. Only the verbs, <i>vertere</i> (or <i>convertere</i> the older word), and <i>transferre</i>, were in ordinary use in Latin. <i>versio</i> is not found. In Quintilian 10.5.4,5 <i>vertere</i> and <i>conversio</i> are used of 'Metaphrase' in its widest sense.</p>	<p>翻譯 Translation は、移搬とか移轉とかの原意を持つ。Translation はラテン語の Translationem が語源で、動詞は <i>transferre</i> (移し搬ぶ) である。一つの媒体から他の媒体への思想・感情の移搬、即ち、一つの國語から他の國語への内容の置き替である。(中略) やはり翻譯のことに Version といふ言葉が用ひられる。これもラテン語から借りた言葉で、源語の <i>vertere</i> は變更するの意味を持つ。(中略) しかし、昔クインティリアヌスの頃には、此の言葉は廣義の Metaphrase の意味に用ひられてゐた。</p>

表 2 : Metaphrase

J. P. Postgate (1922, pp. 1-2)	野上豊一郎 (1938, pp. 88-89)
<p>But for this, and especially for the conversion of prose into verse, or of verse into prose, the name of 'Metaphrase' has been sometimes employed². It then could be used for such transformation as Dryden's unfortunate attempt to turn Milton's blank verse into rhyme and Pope's versifying of Dr Donne's satires.</p> <p>(Note)</p> <p>2. Dryden in the preface to his translation of Ovid's <i>Espistles</i> (p. 237, ed. Ker) applies 'Metaphrase' to literal translation. In Greek, as in Plutarch, Demosth. 8, it is used in the general sense of 'paraphrase.'</p>	<p>Metaphrase は本来ギリシア語で、ローマ時代へかけて Paraphrase の同義語として用ひられてゐたが、近代では、殊にドライデンの <i>Ovid's Epistle</i> 以後は、一語一語・一行一行の嚴密な翻譯を意味するやうになった。多くの字引には直譯となつて居るけれども、今日われわれのいふところの直譯とはちがふ。われわれのいふところの直譯とは、一語一語・一行一行の忠實な移し替ではあるが、忠實だけがその條件となるのではなくて、生硬とか未完成とかいふことも條件となる。原文の <i>idiom</i> をもこなしきれないやうな生硬な未完成な翻譯をわれわれは直譯的な翻譯として排斥する。しかるに、Metaphrase には全然そんな意味はない。のみならず、Metaphrase はしばしば、韻文を散文に、また、散文を韻文に直す場合にも用ひられる。ドライデンがミルトンの blank verse を rhyme に變へたり、ポーブがドンの散文を韻文に書き直したりした時にも此の言葉が用ひられた。</p>

表 3 : Paraphrase

J. P. Postgate (1922, p. 2)	野上豊一郎 (1938, p. 89)
Another form of conversion is the avowed Modernisation of old authors as those of Chaucer by Dryden and Pope. All such may be brought under the general head of Paraphrase, a term in common use for changes of expression in an original in order to give it a simpler or more familiar form, ...	特に古典的作家のものを近代語に書き直す場合には Paraphrase といふ言葉が用ひられる。(中略) Paraphrase の本来の用途は主として古典語の難解な表現を敷衍しながら近代語で言ひ直すことにあるので、例へば、ドライデンやポーブがチョウサを近代語に書き替へたことなどが適例とされてある。

表 4 : Adaptation と Imitation

J. P. Postgate (1922, p. 2)	野上豊一郎 (1938, p. 90)
‘Adaptation’ and ‘Imitation’ take a wider sweep. ... Here the object is not so much to ‘transfer’ as to transplant, to acclimatise, so to speak, an exotic and ensure that hearer or reader shall not find in it aught uncomfortably strange. Imitation goes further. In Adaptation the original is at least a base, in Imitation it is no more than a model.	翻譯に類するものに翻案がある。英語の Adaptation である。これは外國の或る作品からその構成とか思想とかを借りて、それを自國の風習に適合するやうに作り直すことである。作り直されたものは翻案者のものではあるけれども、その基底には原作の構成なり思想なりが現存して居る。それが一層自由になつて模作 Imitation となると、もはや原作は一種のモデルにしかすぎないもので、その基底の構想をば形づくらない。

4.2 「忠實といふこと」

野上が「忠實といふこと」というテーマを詳らかに論じている箇所（野上 1938, pp. 5-23）では、Homer の著名な翻訳者 3 名（ポーブ、クーパ、ニューマン）の直接引用をはじめ、カーズン卿やロセッティなど、ポストゲイトとの重複がいくつも見られる。

まず野上は、「翻譯の第一必要條件は忠實といふことである。さうして、原物に最も近いものを作り出す翻譯者が最上の翻譯者である」（野上 1938, p. 5）と述べる。ポストゲイトの前提もまた同様に、“By general consent, though not by universal practice, the prime merit of a translation proper is Faithfulness, and he is the best translator whose work is nearest to his original.” (Postgate 1922, p.3) である。以下に具体例で主要な点を比較してみよう。

表 5 : Homer の翻訳者

J. P. Postgate (1922, p.3)	野上豊一郎 (1938, p. 5, p. 80)
<p>As translators of Homer, Alexander Pope, William Cowper and F. W. Newman stand far apart. On the first principle of translation they are agreed. Says the first, 'It is certain no literal translation can be just to an excellent original in a superior language; but it is a great mistake to imagine (as many have done) that a rash paraphrase can make amends for this general defect; which is no less danger to lose the spirit of an ancient by deviating into the modern manners of expression. ... The second says, 'My chief boast is that I have adhered closely to the original,' and the third declares that the translator's 'first duty is a historical one – <i>to be faithful.</i>'</p>	<p>これは一般に承認されている原則の一つであつて、例へば、イギリスに於ける三人の著名なホメーロス翻訳者、ポープ (Alexander Pope)、クーバ (William Cowper)、ニューマン (F. W. Newman) の如きも、その実際の態度に於いては相互に隔たりを持つてゐたにもかかはらず、翻譯は忠實を要件としなければならぬといふ了解に於いては一致してゐた^(一)。</p> <p>(註)</p> <p>(一) ポープ「逐語譯ではたしかに立派な國語で書かれたすぐれた原作に對して正當なものでは在り得ない。さればと云つて、荒つばい意譯が此の缺點を補ひ得ると想像する(多くの人が想像してゐる如く)のは大きな誤である。それは表現の近代的様式の中へ逸れてしまふことに依つて、古代精神を失ふと同様に危険である。」</p> <p>クーバ「私の何よりの誇は、原作にしつかりと固着してゐたことである。」</p> <p>ニューマン「(翻譯者の) 第一の義務は一つの歴史的なものである——即ち、忠實であることである。」</p>

表 6 : Lord Curzon

J. P. Postgate (1922, p. 4)	野上豊一郎 (1938, p. 5, p. 80)
<p>Lord Curzon, 'War Poems and Other Translations' (1915) p. vi, observes: 'The translator should, I think, remember that the work is not primarily his but that of another man of whose ideas he is merely the vehicle and interpreter.'</p>	<p>ロード・カーズン (Lord Curzon) は、翻譯者は先づ第一に自分の仕事をするのではなく、自分は單にその人の思想の媒介者たるに過ぎない別人の仕事をするのだといふことを記憶しなければならぬ^(二)と云つた。</p> <p>(註)</p> <p>(二) Lord Curzon, <i>War Poems and Other Translations</i>, p. vi.</p>

表 7 : Rossetti

J. P. Postgate (1922, pp. 3-4)	野上豊一郎 (1938, p. 6, p. 80)
<p>D. G. Rossetti in the preface to his Translations, p. xiv, enlarges on this text: 'The work of the translator (and with all humility be it spoken) is one of some self-denial.'</p>	<p>ローゼティ (D. G. Rossetti) は、(中略) 翻譯者の仕事は自己否定の仕事だ^(三)と云つた。</p> <p>(註)</p> <p>(三) D. G. Rossetti, <i>Translations</i>, p. xiv.</p>

表 7 にあるように、英国の詩人・画家 Dante Gabriel Rossetti の「自己否定 (self-denial)」という主張を引用した際に、ポストゲイトは不完全な文献情報 (in the preface to his *Translations*, p. xiv) しか示していないが、これは、1861 年に発表された *The early Italian poets: Together with Dante's Vita Nuova* の序文を指す。野上の「註」でも同様に「D. G. Rossetti, *Translations*, p. xiv.」としているが、この場合、偶然の一致という見方には無理があり、ポストゲイトを参照した確証と言える。

4.3 「等量的翻譯」

ポストゲイトは、「commensurateness (同量)」という語を複数回使用し、索引にも載せている (Postgate 1922, p. 65 sqq.)。ポストゲイトの翻譯論において、この語の意味するところは、“A translation must be true to its original in Quantity as well as Quality. The two are not independent, and inattention to the former cannot fail to affect the latter.”であり、量と質の両面からのいわば「等価 (equivalence)」を意味するものである。野上の翻譯論における一貫したキーワードのひとつである「等量的翻譯」も、これと近似の意味を有する。たとえば、次のような説明である。

等量的といふことの最も皮相的な解釋は、原作と同數の辭句を、同じ語法と同じ句法で、同じ文脈を出すやうに、同じ構造に排列することである。西洋語と日本語との間では、正確に語數を對比することは困難であるが、(以下略) (野上 1938, p. 19)

完全な翻譯は、第一に、原作の表現が一語一語の末まで正確な意味を把握して傳へられなければならぬ。次に、用ひられた國語の特性が原作の國語の特性を最近似の度合に於いて聯想させるものでなければならぬ。最後に、さうやつてまとめ上げられた翻譯は、全體として、措辭・語法の點から見ても、文勢・格調の點から見ても、原作のそれ等と同質・同量のうつつしとなつてゐなければならぬ。(野上 1938, p. 93)

翻譯者は或る意味に於いて一箇の作家ではあるが、但し、どこまでも原作者に制約されて自由を持たない作家である。その制約は、要括していふならば、質に於いても、量に於いても、原物と同等のものを作り出さねばならぬといふことである。量について見ても、原物と同量の翻譯を作り出すことは非常に困難な仕事である。殊に韻文に於いては韻律に制限されるので殆んど絶対に不可能である。(野上 1938, p. 95)

このように野上自身も「同質・同量」の「等量的翻譯」は、究極的な理想像にすぎないと認められており、「原物と同等の色調の再現が望めない場合、私はそれ以上に無害な安全な方法を見ない」(野上 1938, p. 101)として、意味だけを伝える「無色的翻譯」が提唱されるのである。

4.4 「無色的翻譯」と「^{モノクローム}単色版的翻譯」

野上の翻譯論は「無色的翻譯論」として、しばしば批判されてきた(別宮 1975, pp. 56-60; 1985, pp. 54-63)。野上の翻譯論を端的に表すために用いられるキーワードであると同時に、非難の矢面に立たされるのが、「無色的翻譯」という概念である。野上はこう説明している。

翻譯者がその翻譯に於いて原物とちがった色調を出すとか、原物の色調を無視してかかるとか、さういつた態度は忠實といふことからは甚だ遠ざかるものであるが、しかし、その色調の基本となるべき詩格の移植が望めない語系の上に立つて翻譯をする時は、他に何等かの等量的効果を持ち來たすべき方法はないものだらうか。その方法は、少なくとも積極的には考へられないが、消極的にはただ一つ考へられるものがある。比喩的にいへば、無色にすることである。(野上 1938, pp. 99-100)

一方、ポストゲイトは米国の古典学者ギルダースリーヴ(Basil Lanneau Gildersleeve)を直接引用して(“Theoretically the translation ought to be achromatic. It may be nothing but an etching; but in the Muses’ name do not color an etching....”),理論上の理想を示している(Postgate 1922, p. 63)。この「無色的(achromatic)」以外にも、「無色性(colourlessness)」という語も登場するが、「単色(monochrome)」という概念は、ポストゲイトの著作では使用されていない。

野上は、日本文学を西洋語に翻譯する際に遭遇する「翻譯の不可能性」に対する「一つの代償的提案」としても、「無色的翻譯」という方法を示している(野上 1938, pp. 118-127)。ここで彼が念頭に置いているのは、和歌や謡曲など伝統的な日本語韻文の西洋語への翻譯についてである。先の引用における「消極的」「比喩的」という譲歩付きの説明でも明らかのように、西洋文学の日本語への翻譯においては「無色的翻譯」を手放して推奨しているわけではない。しかしながら、西洋語への粗慢な「同化(domestication)」がなされるのではないかという懸念からは(ただし、野上自身は「同化」という語を用いているわけではないが)、日本文学の西洋語への翻譯において、「無色的翻譯」がより重要な意味合いを有するはずだ(事実、野上は『萬葉集』の英訳にローマ字の併記さえ推奨している)。

ちなみに、「無色的翻譯」という発想が自分の独創ではないことを野上は認めた箇所がひとつだけある、とカレンは指摘している(Curran 2008, pp. 118-123)。それは、以下の部分に相当する。

私の日本文学の翻譯についての提案は、その無色的翻譯を以つて原物の意味だけを理智的に傳へ、原物の感情的表現は原物その物によつて味得させようといふのである。但し、斷つて置かねばならぬことは、この思ひつきは私の獨創ではない。オクスフォード及びケンブリッジに於けるギリシア古典の翻譯の仕方から思ひついたのである。

(野上 1938, pp. 125-126)

しかしながら、ここでも野上は、ポストゲイトの名前や文献名を明示しているわけではない。単に「ギリシア古典の翻訳の仕方から思いついた」という曖昧な記述で終わらせているのみである。

なお、「^{モノクローム}単色版的翻譯」に関しては、「自分勝手の三色版にされちやかなはない」ということから、「無色的翻譯」のひとつの例として、野上自身が補足したものであると思われる。ただし、「^{モノクローム}単色版的翻譯なんかは、しかし、本統をいふと、安全第一主義の甚だ消極的なもので、眞に才能ある翻譯者の潔しとしない行き方だと思つてゐる。明治維新以來七十年になるのだから、もうそろそろ本格的な翻譯が出てよい頃だ」と断りを加えているほどであり(野上 1938, pp. 217-223)、野上の翻譯論を代表する概念となり得るのかについては、慎重な扱いを要する。

4.5 「翻譯の二つの態度」

翻譯に対する態度として、野上は「回顧的・受容的態度」と「先見的・適合的態度」の2つを考えるが、この概念はポストゲイトの“retrospective translation”と“prospective translation”に対応する(表 8)。

表 8 : 「翻譯の二つの態度」

J. P. Postgate (1922, p. 22)	野上豊一郎 (1938, p. 75)
In Retrospective translation ascertainment and comprehension come first, and expression follows in their train. But in Prospective translation comprehension is assumed to be already attained, and the whole mental effort may be concentrated on Expression.	回顧的・受容的態度に於いては、常に対象は原作であつて、原作と同一價値のものを異なつた國語で作り出すことが目的であるから、先づ完全な理解が行はれ、忠實な表現がそれにつづくべきである。先見的・適合的態度に於いては、理解の仕事はすでに片づいた所から始まつて、すべての努力は表現に集注される。

ただし野上は、「翻譯の二つの態度」というテーマをそもそも次のように設定している。

西洋語で表現されてあるものを日本語で表現するといふことは、均等の表現を日本語の中に搜し求めることであるか、或ひは新らしく作り出すことであるか。此處で、翻譯の態度がはつきりと別れて来る。(野上 1938, p. 68)

この論点を言い換えると、西洋のものを「^{日本}本的なものに作り直す」のか、「^{西洋}のものらしく譯す」のかということでもある。前者は「先見的・適合的態度」に、後者は「回顧的・受容的態度」に対応する。そして、「受容的態度に於いては、二つの國語の間に均等を要求し得るやうな表現の創作がその仕事であり、適合的態度については、さういつた表現の發見がその仕事である」と、野上は説明するのである。そして、両者の中間に「^{第三}の態度」として「^{モノクローム}單色版的態度」を設けるが、これは表現には見切りをつけて、原作の内容や意味だけを伝えるという「消

極的態度」であり、「正道的な行き方ではない」とする(野上 1938, pp. 70-75)。彼が理想とする「最上の翻譯者」は、2つの態度を併せ持つ者なのである(野上 1938, p. 93)。

4.6 Wilamowitz-Moellendorff の引用

ドイツの古典文献学者である Wilamowitz-Moellendorff の翻譯論については、三ッ木編訳(2008)に収録された「翻譯とは何か」が参考になるが、その翻譯方法は原作の表現形式から自由になり、自国ドイツの古典文体に忠実であることを主張するもの(目標言語志向)である。これは、一般的に野上の翻譯論に付与されるイメージ(起点言語志向)とは対極の考え方だが、野上は「ヴィラモウイツ・モエーレンドルフ教授」に繰り返し言及している。ポストゲイトが、“Professor Wilamowitz”を頻繁に引用していることにも大いに関係すると思われるが、たとえば以下のような事例がある(表 9 から 11)。

表 9：逐語訳の弊害

J. P. Postgate (1922, p. 5)	野上豊一郎 (1938, p. 35, p. 81)
<p>Its presence may be observed in the excessive emphasis which not a few translators lay upon fidelity to the spirit, which to them excuses infidelity to the text as Professor Wilamowitz in the dictum that ‘Every correct translation is a travesty³.’</p> <p>(Note)</p> <p>3. ‘Jede rechte Uebersetzung ist travestie’ (‘Was ist Uebersetzen,’ preface to his edition of Euripides Hippolytos p. 7) which I hope but am not sure I have not ‘travestied.’</p>	<p>ヴィラモウイツ・モエーレンドルフ教授が、正確な翻譯はみな<small>わるまね</small>悪真似だ (Jede rechte Uebersetzung ist travestie^(九)) といった言葉が適切にあてはまる。逐語譯なるものの弊害は其處にひそむ。</p> <p>(註)</p> <p>(九) ヴィラモウイツ・モエーレンドルフ教授の「ヒッポリュトス」の翻譯の序文、<i>Was ist Uebersetzen?</i></p>

野上は「轉生 (metempsychosis)」のメタファーで文学翻譯を次のように説明している。

文學はみな表現の衣裳をまとつてゐるが、詩のまとふきらびやかなリズムの衣裳、それを剥ぎとれば何が残るか。(中略)翻譯の問題は、いづれにしても、一つの轉生 metempsychosis の問題である。原作者のあたりに生まれたものが、いかに翻譯者のあたりに轉生するかの問題である。さうして轉生の契機をなすところのものは、翻譯者の理解力と創造力よりほかの何物でもない。

(野上 1938, pp. 79-80)

このような衣裳の着せ替えのたとえとしては、以下の箇所も該当するが、野上の説明では「同質・同量」という等価性を意識したものとなる(表 10)。

表 10 : Metempsychosis

J. P. Postgate (1922, p. 7)	野上豊一郎 (1938, p. 87, p. 108)
<p>Professor Wilamowitz (op. cit. p. 7) maintains that a translator ‘must not translate either words or sentences but take up and reproduce thoughts and feelings. The covering must be something new; the content what it was.... The soul remains, but the body is changed. True translation is a metempsychosis.’</p>	<p>一つの媒体から他の媒体への思想・感情の移搬、即ち、一つの國語から他の國語への内容の置き替である。置き替へられた内容は、初めのものと同質・同量のものでなければならぬ。たとへていへば、着物の着せ替^(一)をするやうなもので、着物は替はるけれども、中身は替はつてはならない。</p> <p>(註)</p> <p>(一) ヴィラモウィツ・モェーレンドルフ教授の ‘Jede rechte Uebersetzung ist travestie’ といった言葉の travestie は a change of vesture の意味である。彼は外衣が變つても中身の變らないことを更に肉體が變つても精神の變らないことにも譬へ、翻譯は一つの metempsychosis (轉生) だとも言った。</p>

ラテン語と英語の詩格の形式に関して、次の表 11 で取り上げた野上の註(三)には「T・P・ポストゲイト教授。(Classical Quarterly, IV, 1910).」という記載がある。イニシャルは違うが、これは「J・P・ポストゲイト」の誤記ではないかと思われる。同一人物であれば、野上が当該のポストゲイトに言及した唯一のものである。確かに、ポストゲイトは同年に同ジャーナルに論文を発表している (Postgate 1910a, 1910b, 1910c, 1910d) が、1922 年の書籍にも“2. *Classical Quarterly*, IV, 1910, p. 286.”という脚注がある (Postgate 1922, p. 70)。

表 11 : 詩格

J. P. Postgate (1922, p. 67, pp. 69-70)	野上豊一郎 (1938, pp. 95-96, p. 108)
<p>Professor Wilamowitz (op. cit. p. 16) notes that translations must be longer than originals ‘unless one would sacrifice here the style and there the thought.’ Somewhat longer certainly, in most cases. ...</p> <p>The true correspondent to the French Alexandrine is not the English Alexandrine (which is metrically dissimilar) but the English decasyllable thought one to two syllables shorter. The same is frequently assumed to be the equivalent of the iambic trimeter or senarius of Greek and Latin¹. But in its carrying capacity it seems to lie between the senarius and the hexameter. I have said elsewhere²:</p>	<p>ヴィラモウィツ・モェーレンドルフ教授は、翻譯の方が長くなるのが普通だ^(二)と言った。それは主として原作が古典である場合について言ったのであるが、彼はなほ、ゲーテやシルラの十二綴音 (三歩句) は近代の十綴音 (blank verse) よりもアイスキュロスのもを翻譯するのに適し、十綴音 (blank verse) の方は却つてエウリピデースのものに適すると言った。その説の當否は私にはよくわからないが、韻文の翻譯に於いて、原物の詩格は必ずしも形式的に保存される必要のないことを暗示したものである。英語の十綴音の詩はラテンの^{ヘクサシラ}六脚詩句に匹敵する^(三)といふやうなことも言はれる。</p>

<p>(Note)</p> <p>1. Professor Wilamowitz (op. cit. p. 19) makes the interesting observation that the twelve-syllabled line ('trimeter') of Schiller and Goethe is better suited to render Aeschylus than the ten-syllabled ('blank verse') which is the proper measure for Euripides; and he supports this view by a version from Pandora into Aeschylean trimeters.</p> <p>2. <i>Classical Quarterly</i>, IV, 1910, p. 286.</p>	<p>(註)</p> <p>(二) ヴィラモウィツ・モエーレンドルフ教授の翻譯「ヒッポリュトス」の序文 <i>Was ist Uebersetzen?</i></p> <p>(三) T・P・ポストゲイト教授。(<i>Classical Quarterly</i>, IV, 1910).</p>
--	--

4.7 その他

他にも、たとえばアーノルド (Matthew Arnold) からの引用 (Postgate 1922, p. 19; 野上 1938, p. 77) も一致している。また、ラテン語原文の事例として、アプレイウス (Apuleius) 作「キューピッドとサイキ (Cupid and Psyche)」のペイタ (Walter Pater) 訳 (Postgate 1922, pp. 12-13; 野上 1938, pp. 6-7)、フランス語原文の事例として、Ritchie and Moore の *Translation from the French* (1918, p. 9) からのブリュヌティエール (F. Brunetière) の散文 (Postgate 1922, p. 15; 野上 1938, pp. 12-14) など、両書における同一事例の引用は少なくないが、紙幅の都合で省略する。

以上、2 つのテキストにおける主要な論点を取り上げてきた。限られた論点の比較と分析であったが、野上の理論的枠組みにポストゲイトからの影響が濃厚に見られることを確認し、そしてその具体的な内容を詳細に検証できたのではないだろうか。野上の後期翻訳論の主張を単純化して要約すれば、「等量的翻譯」のために「無色的翻譯」を想定し、その理想に至るプロセスとして「翻譯の二つの態度」を考えた、ということになるのかもしれない。だが野上の論点は時として、もつれた糸のようである。特に「等量」という等価を変奏した考え方は、現代の翻訳理論においても争点 (たとえば, Kenny 1998 参照) となっているように、多様な問題を喚起する概念であり、野上のテキストもその例外ではない。

野上のテキストにおいて、何についての「等量」を取り上げて論じているのかによって、その意味するところは変わってくる。特に後期野上の翻訳論では、能の翻譯をはじめ、日本文学の西洋語への翻譯を新たに考察に加えた点が肝要である。当時 (そして現代においても)、日本語への翻譯と日本語からの翻譯は非対称的なのだ。日本の伝統芸術である能が次第に英文学者野上の中心的な研究テーマとなっていくのだが、これは、欧米列強に対して日本文学を対等に認知させるという時代の要請とも無関係ではあるまい。さらに、「無色」に対する考えが前期から後期にかけて大きくねじれるという点については、ポストゲイトの翻訳論との関係が深いと思われる。西洋語同士の間での翻譯を論じた英国の古典学者からの影響と、翻譯の方向性における非対称的現実とが相俟って錯雑した野上の翻訳論は、多層的に読み解かなければならない。

5. 大正から昭和初期の日本における翻訳をとりまくコンテキスト

野上豊一郎が翻訳に関する論考を発表した大正から昭和初期は、日本の翻訳界がどのような状況にあったのか。時代背景も踏まえて野上のテキストを考察する必要があるだろう。

1914(大正 3)年に日本は第一次世界大戦に参戦し、結果として戦勝国の末席に連なった。その後、1931(昭和 6)年の満州事変で中国東北部を占領し、1937(昭和 12)年の盧溝橋事件を契機として日中戦争が始まり、やがて 1939(昭和 14)年の第二次世界大戦へと続く軍国主義の時代をむかえた。一方、国内の文化的状況を見れば、第一次世界大戦後の社会的変化により、大衆文化が登場し、昭和初期にはさまざまな文学全集が相次いで刊行されている。いわゆる円本ブームで文学も大衆化した時代であった。このようなコンテキストにおいて、西洋文学の日本語への翻訳と日本文学の西洋語への翻訳には、当然異なる課題があったはずだ。野上も「日本語を西洋語に直す場合については、実際問題として事情を異にする理由がいろいろある」(野上 1938, p. 3)と述べている。

前者については、道家(1956, p. 23)が、翻訳に対する 2 つの相反する方向として野上の用いた「受容的態度」と「適合的態度」を取り上げて、この 2 つの態度の関係は、「歴史的な状況」で規定されるとしている。それは「自国語・自国文学の発展の状態、その国における文学の社会的な位置、つまり誰に読まれるかの問題、さらにこれと結びつく民族的自覚の程度などによって規定される」のである。そして、日本の翻訳界を以下のように描く。

二葉亭のきわめて受容的な方向、初期の鷗外—『於母影』から『即興詩人』にいたる—や逍遙のシェクスピア訳などの極端に適合的・準創作的態度、日露戦争後の鷗外の翻訳態度の急変、第一次大戦後の直訳洪水時代のいちじるしい受容的態度の優勢などは、読者層の変化とその言語・文学教養圏の変化、民族主義やコスモポリチズムによる主体的な態度の変化、その間に発展した日本の文体や文学そのものの変化などの客観的な条件に大きく左右されていることは否定できないであろう。(道家 1956, p. 24)

西洋文学の日本語への翻訳状況としては、道家の言葉を借りれば、「第一次大戦後の直訳洪水時代のいちじるしい受容的態度の優勢」が顕著であったのである。いわゆる大衆文化の出現とともに、「直訳」された翻訳文学が国内に洪水の如くあふれ席卷していた時代をわが国は経験していた。そして、昭和初期には円本ブームによって、この傾向がさらに加速されたと考えられる。

1927 年に刊行を開始した円本全集、新潮社『世界文学全集』(第 1 期 38 巻)は世界文学全集ブームの先鞭をつけるとともに、原典からの翻訳をかなりの比率で採用して、その後の文学全集出版の範となった。文学全集という形をとった翻訳文学体系化の試みは、読書大衆化時代を反映して、大衆文学ジャンルにまで及んだ。1929(昭和 4)年、博文館と平凡社は同時に『世界探偵小説全集』刊行に着手する。その前年に改造社が刊行を開始した『世界大衆文学全集』(全 80 巻)は、その「大衆文学」なるコンセプトの幅広さ、

雑駁さ、曖昧さにおいて、重訳、抄訳ものを多数含むという点で、昭和初期の文化状況、読書状況を象徴的に体現するものと言えた。(井上 2005, p. 197)

このような当時の日本における翻訳状況を背景にして、1934(昭和 9)年には谷崎潤一郎が『文章讀本』を著し、そのなかの「西洋の文章と日本の文章」という一節で、欧文脈に対して「體裁は日本文でありますけれども、實は外國文の化け物」(谷崎 1934/1968, p. 129)と強く反発したのも故なきことではない。野上豊一郎の『翻譯論—翻譯の理論と實際』も同時代に位置づけられるわけだが、本書の出版直後に、中島健蔵(1938.2)、小林秀雄(1938.3)、本多顯彰(1938.4)、阿部知二(1938.5)、小林英夫(1938.5)らの書評が出ており、「混沌たるわが翻譯界の現状」(小林英夫)を鑑みて、いずれも好意的に評している。

「翻譯文化」といふ言葉が悪い意味で使はれ、嫌な響きを傳へるのは、翻譯そのものが甚だ困難で、ともすれば悪翻譯が行はれたまゝその處置がつかないところから來るが、本當は、文化流通の本質的な困難から發するのである。(中略)我々が外國語を學んだ頃は、不幸にして悪翻譯の汎濫時代であつた。少數を除いて、日本語としての十分な移植どころか、先づ以てモノクローム的即ち消極的正確さを要求し、それ以後に表現としての完成を求めざるを得ないと思はせたのであつた。(中島 1938)

語系を異にしてゐるが故に、日本語への、もしくは、日本語からの翻譯は、諸他の國民が經驗しない諸困難を、日本の翻譯家は克服しなければならない。さういふ困難な事情は、當然、翻譯に關する考察、論争を、これまでも屢々生んで來、ことに近來は日本文學の海外紹介を中心にして、このことが一部の人々によつて熱心に考究されるやうになつて來た。(本多 1938)

上記の書評からも、当時のわが国における翻譯界の一面が窺える。不正確な「悪翻譯」への不満や、日本文學を海外へと紹介する上での困難さなどが問題となっていたことがわかる。この時代に日本文學を西洋語に翻譯して世界に発信することは、政治的にも重要な位置づけにあった。日本學術振興会による英訳『萬葉集』の刊行は 1940(昭和 15)年であるが、「戦前には当局からの要請による「国威宣揚」の意図が、時に余りに明白で、翻譯内容まで影響を受けている状態であつた」(齋藤 1969, p. 190)という。実際に、野上も『萬葉集』の翻譯プロジェクトに言及しており、「近時流行の國粹主義の風潮に附和していふのではない」と前置きを入れながらも、日本人による訳業を高く評価して、「『萬葉集』の情緒とその表現の特殊性は、決して日本人以外の何者によつても十分に正しくは理解されない」(野上 1938, pp. 109-128)とさえ述べている⁶。日本文學を西洋語に翻譯する際の問題は、野上の大きな関心事であつたと言える。

アーサー・ウェイリーは『源氏物語』の英訳者として著名だが、謡曲の翻譯者でもあつた。謡曲の西洋語への翻譯を論じながら、野上はウェイリーの訳文などを中心に、韻律や措辞法の

点からの問題を具体的に取り上げている。たとえば、次のような指摘がある。

日本語の音聲と西洋語の音聲の間には基本的共通の素質はなく、日本の詩法は音綴を基礎とするのに對し、西洋の詩法は音の抑揚または長短を基礎とするものであり、たとひいかほど巧妙に詩法のテクニックを應用しても、謡曲のリズムを西洋語に複製することは全然期待されないことであるから。(野上 1938, p. 166)

野上の『翻譯論—翻譯の理論と實際』では、日本文学の翻訳と西洋文学の翻訳という、コンテキストの要請が全く異なる問題を1冊のなかで論じているわけである。この2つの翻訳の方向性について、野上自身は、「理論としては結局同じこと」(野上 1938, p. 116)としているが、果たしてそうであろうか。大正から昭和初期の日本における翻訳界の状況を考えると、この2つは明らかに異なる時代的要請を受けている。さらに加えて、英国の古典学者による翻譯論を引き写した結果、野上の翻譯論は決定的な矛盾をかかえこみ、それが幾重にも錯綜する。

6. おわりに

野上豊一郎の翻譯論は、時折思い出されたかのように引用されることがあり、ある程度は周知された著作だと言える。だが、これまでは本格的な研究対象になってきたとは言い難い。たとえば、井上(1994)が岩野泡鳴の「棒訳」を論じる際に、以下のように言及しているが、やはり正面から論ずることなく、「無色的」という概念を「単なる比喩」として片付けている。

一字一句を忠実に移し替えたものが正確な「直訳」であるという立場は、昭和に入ってから野上豊一郎によって「理論化」される。翻訳者は「質に於いても、量に於いても、原物と同等のものを作り出さねばならぬ」(『翻譯論』、昭和 13 年)という前提から出発した野上は、原物と同等の色調の再現が望めぬ以上「翻訳を無色的にする」ことこそが望ましいとの結論に辿り着く。野上の言う、原文の輪郭を正確に捉えながら翻訳者の解釈は一切排除した「無色的」翻訳なるものが、翻訳作業の実際においては、単なる比喩、心構え以上の意味をもつものでないことは言うまでもない。(井上 1994, pp. 353-354)

1970年代にわが国で刊行されていたプロローグやセイヴァリーの邦訳書のなかで、すでに日本に紹介されていたポストゲイトの翻譯論は、当時日本における翻譯研究が未成熟であったせいもあろうか、さして注目されることもなかった。その後も、野上の翻譯論との関係から論じられることは皆無であった。この点で、カレンの洞察は斬新で画期的なものであり、本稿において従来とは全く別の観点から筆者が野上の言説を再考する契機となった。「無色的翻譯」に対する態度のぶれからも明らかであるように、大正から昭和初期の翻訳をめぐる状況のなかで、野上の翻譯論には多層的な読みが必要なのである。

本稿で論じてきたように、野上豊一郎のテキストは、1932(昭和 7)年の『翻譯論』の前後で乖離している。この一因として、ポストゲイトからの影響の可能性が十分に考えられる。また、

1938(昭和 13)年の『翻譯論—翻譯の理論と實際』においては、謡曲をはじめとする日本文学の西洋語への翻訳を同じ地平に組み入れたことでさらに問題を複雑にした、と言える。

チェーホフの翻訳者として著名な神西清は、野上の提唱した「単色版的翻譯」という合理主義を一方で認めながらも、「うちに無限の矛盾を含みながら保たれている調和」(神西 1938/1976, p. 98)と称して、次のように述べている。

翻譯といふ問題はもともと生木のやうにくすぶるのが運命である。もともと自然の法則に反して燃えることを強制されてゐるからである。そこで単色版的翻譯といふ頗る便利な諦観が、原則として翻譯の救ひとなつて現はれるといふことになる。しかしこれが、単に翻譯者のために救ひであるだけでは何の意味もない。読者のための救ひであつても詰まらない。それは翻譯そのものの救ひでなければならず、そのためにはやはり、翻譯の論理は、生理や心理を道伴れに永遠に苦しんで行くほかはないのである。

(神西 1938/1976, p. 100)

同時代に生きた神西は、このような形でみずからの苦悩ばかりでなく、野上の翻譯論における「無限の矛盾」をも代弁しているかのようである。なお、野上自身もまた西洋文学の翻訳者であった。「私は自分でも一二の翻譯を試みたことがある。それが器用になだらかに行つてみないからと云つて、それを辯護するものと取られては迷惑である」(野上 1919, p. 112)とも書き残している。本稿の目的は、野上豊一郎の翻譯論を再考することであり、実際の翻譯テキストの分析にまでは考察が及んでいないが、この点については稿を改めたい。

.....

【著者紹介】

長沼美香子(NAGANUMA Mikako)立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任准教授。日本通訳翻訳学会理事。論文に、「日本における「翻譯」の誕生」(『翻譯研究への招待』4号、2010年)、「わが国の大学・大学院における翻譯教育の実態調査概要」「アンケートにみる日本の大学翻譯教育の現状」(『通訳翻訳研究』第8号、2008年)、「翻譯における「名詞化」という文法的比喩」(『通訳研究』第6号、2006年)など。

【註】

1. 本稿での表記は「野上豊一郎」ではなく、新字体を用いて「野上豊一郎」で統一する。
2. 『翻譯論—翻譯の理論と實際』(1938)の詳細な目次は以下の通り。このうち「翻譯の理論」は、1932年の『翻譯論』と同一内容の再録、また「日本文学の翻譯」は1936年に『東京朝日新聞』に連載された論考である。「謡曲の翻譯について」の一部は、『能の再生』(1935)にも収録されている。

序

翻譯の理論(一 考察範囲の限定 二 忠實といふこと 三 形式の正確な複製 四 格調と表現の動機 五 更に表現の動機について 六 翻譯の二つの態度 七 受容と適合 八 結語 註)

翻譯の態度(一 完全な翻譯 二 無色的翻譯 三 現代語翻譯 註)

日本文學の翻譯(一 古典の選擇 二 意味と翻譯 三 翻譯の不可能性 四 一つの代償的提案 註)

謡曲の翻譯について(一 謡曲の翻譯者 二 翻譯された謡曲 三 選擇された曲目 四 選擇の批判 五 謡曲構成の知識 六 韻文譯か散文譯か 七 かかりことばの問題 八 臺詞擔任の不合理の問題 九 對話と敘述の混同の問題 十 主格省略の問題 註)

菟菟問答(理論と實際 意味と調子 文學的翻譯 古典と現代語 單色版的翻譯 知性の問題)

附記

3. 「臼川(きゅうせん)」は野上豊一郎の号(ペンネーム)である。
4. Savory (1957) の原文では、本文中 (p. 79) と本文末尾の BIBLIOGRAPHY (p. 153) のどちらともポストゲイトの著作名を「*Translations and Translators*」と誤って紹介しており、訳書でも誤りが踏襲されている。1970年に邦訳されたモーガンの文献解題では、原著の正しい情報「*Translation and translations*」(Morgan, 1959, p. 281) にもかかわらず、「翻訳と翻訳者たち」と誤訳されている。両書に同一の翻訳者(別宮貞徳)がかかっていることが、この誤訳と無関係ではないと推測される。
5. Morgan (1959, p. 281) における該当する原文は以下の通り。
1922. POSTGATE, J. B. *Translation and translations, theory and practice*. London. – “The prime merit of a tr. Is faithfulness” “The Faithful Translator will give the letter where possible, but in any case the spirit.” “The Transfuser is only too prone to sacrifice the letter and the spirit as well.”
6. 実際には、当時東北帝国大学で教鞭をとっていた英国人の詩人ホヰソンが最終稿に手を加えている(齋藤 1969, p. 190)。

【引用文献】

- 阿部知二 (1938) 「野上豊一郎『翻譯論』」『文學界』5月号、235-255頁. 文藝春秋社.
- Amos, F. R. (1920). *Early theories of translation*. La Vergne: General Books.
- 別宮貞徳 (1975) 『翻譯を学ぶ』八潮出版社.
- 別宮貞徳 (1985) 『翻譯と批評』講談社.
- Curran, B. (2008). *Theatre translation theory and performance in contemporary Japan: Native voices, foreign bodies*. Manchester: St. Jerome.
- 道家忠道 (1956) 「翻譯文學の問題—『ファウスト』翻譯をめぐる—」『文學』5月号、VOL. 24、20-30

頁. 岩波書店.

本多顯彰 (1938) 「野上氏の創見多き翻譯論」『東京日日新聞』4月27日.

井上健 (1994) 「岩野泡鳴訳、アーサー・シモンズ『表象派の文学運動』」大澤吉博編『テキストの
発見』(349-363頁)中央公論社.

井上健 (2005) 「文化と文体の翻訳をめぐる」秋山正幸・榎本義子編『比較文学の世界』
(179-201頁)南雲堂.

神西清 (1938/1976) 「翻訳の生理・心理」『神西清全集 第六巻』文治堂.

Kenny, D. (1998) Equivalence. In M. Baker (Ed.) *Routledge encyclopedia of translation studies*.
(pp. 77-80). London and New York: Routledge.

小林秀雄 (1938/1968) 「野上豊一郎の『翻譯論』」『小林秀雄全集 第四巻』新潮社.

小林英夫 (1938) 「野上豊一郎氏著『翻譯論』」『朝日新聞』5月9日.

Kondo, M., & Wakabayashi, J. (1998) Japanese tradition. In M. Baker (Ed.) *Routledge
encyclopedia of translation studies*. (pp. 485-494). London and New York: Routledge.

水野的 (2007) 「近代日本の文学的多元システムと翻訳の位相—直訳の系譜」『翻訳研究への招
待』3-43頁. 日本通訳学会 翻訳研究分科会.

モーガン, B. Q. (1970) 「翻訳に関する文献書目解題」R. A. ブローア編『翻訳のすべて』(日本
科学技術翻訳協会訳編) (347-372頁)丸善. [原著: Morgan, B. Q. (1959). *A critical
bibliography of works on translation*. In R. A. Brower (Ed.) *On translations*. (pp. 271-296).
Cambridge, MA: Harvard University Press.]

中島健蔵 (1938) 「『翻譯論』の示唆 野上豊一郎氏の近著について」『帝國大學新聞』(復刻版)
不二出版.

野上豊一郎 (1919) 「自分を捨てることの必要—翻譯の根本問題に關する一つの注意」『新潮』
第三十卷第三號、108-112頁. 新潮社.

野上豊一郎 (1921a) 「翻譯可能の標準について」『英文學研究』第三冊、131-153頁. 東京帝國
大學英文學會.

野上豊一郎 (1921b) 「翻譯可能の範圍に就て(英文學會に於ける野上白川氏の講演)」『英語青
年』第四十六卷第一號、182頁. 英語青年社.

野上豊一郎 (1932a) 「翻譯と能」『英文學研究』第十二卷第一、114-123頁. 東京帝國大學英文
學會.

野上豊一郎 (1932b) 『日本文學と外來思潮との交渉(四)西洋文學』岩波書店.

野上豊一郎 (1932c) 『翻譯論』岩波書店.

野上豊一郎 (1938) 『翻譯論—翻譯の理論と實際』岩波書店.

野上豊一郎 (2009) 『野上豊一郎批評集成—能とは何か 上・下』書肆心水.

大久保友博(2009) 「野上豊一郎『翻譯論』の誤読」

[Online] 2010年4月1日 http://www.alz.jp/221b/aozora/ts_nogami.pdf より情報取得.

Postgate, J. P. (1910a). Horatiana. *The classical quarterly*, 4 (2), 106-111.

Postgate, J. P. (1910b). On Ovid Fasti VI. 263 sqq. *The classical quarterly*, 4 (3), 196-200.

Postgate, J. P. (1910c). Emendations of Claudian. *The classical quarterly*, 4 (4), 257-262.

- Postgate, J. P. (1910d). A new translation of Horace's Odes. *The classical quarterly*, 4 (4), 286-293.
- Postgate, J.P. (1922). *Translation and translations: Theory and practice*. London: G. Bell and Sons.
- 齋藤襄治 (1969)「英訳された日本文学作品」日本の英学 100 年編集部編 (土居光知他監修)『日本の英学 100 年 昭和編』(188-199 頁) 研究社出版.
- 佐藤美希 (2008)「昭和前半の英文学翻訳規範と英文学研究」『翻訳研究への招待 2』11-38 頁. 日本通訳学会 翻訳研究分科会.
- セイヴァリー, T. H. (1970)『翻訳入門—その理念と技法』(別宮貞徳訳) 八潮出版社. [原著: Savory, T. H. (1957). *The art of translation*. London: Cape.]
- 関栄司 (1993)「野上豊一郎博士著作目録」『能楽研究』第十七号、155-174 頁. 野上記念法政大学能楽研究所.
- Shorey, P. (1923). Translation and translations by J. P. Postgate. *Classical philology*, 18 (3), 280-284.
- Steiner, G. (1975). *After Babel: Aspects of language and translation*. Oxford: Oxford University Press.
- 谷崎潤一郎 (1934/1968)「文章讀本」『谷崎潤一郎全集 第二十一卷』(87-246 頁) 中央公論社.
- 宇田健 (編) (1995)『山莊往来—野上豊一郎・野上弥生子往復書簡』岩波書店.
- ヴィラモーヴィッツ=メーレンドルフ, U. v. (1891/2008)「翻訳とは何か」三ッ木道夫編訳『思想としての翻訳』(86-106 頁) 白水社. [原著: Wilamowitz-Moellendorff, U. v. (1925) *Was ist übersetzen? Reden und Vorträge*: Berlin.]
- Weissbort, D., & Eysteinsson, A. (Eds.) (2006). *Translation - theory and practice: A historical reader*. Oxford: Oxford University Press.